

## ハイデガー・フォーラム第18回大会

### 応募要旨3

(自由テーマ)

## 「死」は共有可能か？ ——ハイデガーと和辻との対話

人は自らの「死」を経験することができない。一方で、死が訪れるとき、人はそれを経験する能力を失っている。他方で、経験の能力を有する間、死は不在である。自身の死は、いつか現実化する「可能性」として経験されるほかない。

その可能性を他者と共有することはできるだろうか。一例として、ある老夫婦を思い浮かべてみよう。長年連れ添った妻が死へ赴こうとしている。夫は妻とともに、差し迫った可能性を受けとめようとするだろう。今、ここで死にゆくのは妻であって、夫ではない。にもかかわらず夫は、妻とともに、差し迫った可能性を引き受ける。可能性としての死を共有し、自らもまた死すべきものであることを学ぶ。そしていつか彼自身、死へ赴く。他者の死は共有可能であるように思われる。

しかしハイデガーによれば、各人は自らの死を経験するように、他者の死を経験することができない。死とは「もはや現存在しえないという可能性」を意味する。この可能性は、現存在する一人ひとりによって引き受けられるほかない。可能性を共有する余地はないのだ。他者にできること、それはもっぱら立ち会い、目撃することだけである。死は存在論的に「そのつど私のものであること」(Jemeinigkeit)と「実存」によって構成されるから、現存在は各々の死を引き受けなければならない。

この見解は、ハイデガーと同年代の日本の哲学者、和辻哲郎によって批判される。和辻その人は、「人間」——人と人との間柄——という視角から、「死」へアプローチする。誕生や結婚は人間の出来事であり、他者が参与できるものである。それと同様に、死は人間の出来事であり、他者はこれに参与できる。和辻によれば死は「万人の参与し得る最も公共的な現象」である。

「死」ははたして共有可能なのか。その可能性をめぐって、二人の哲学者の所見は真っ向から対立する。見解の相違はなにに由来するのか。そもそも「死」という語で、両者は同じ事象を指示しているのか。これらの問いに導かれて、本発表では二人の哲学者から回答を引き出し、対話的探究を進める。

はじめに『存在と時間』における「死」の記述を確認しておこう。そこでは「死」が各々の実存の可能性と捉えられる。和辻はこれに手厳しい批判を加える。ハイデガーはそれにどう応えるだろうか。この問いを携えて、私たちは「死」の実存論的概念

を精査する。それとともに「死」(Tod)と「死亡」(Ableben)が明確に区別される。この概念的区別を踏まえずに、和辻はハイデガーの「死」の理解を批判しており、『存在と時間』の正確な読解に失敗している。和辻のハイデガー批判に対しては、しばしばこのような論評が加えられる。なるほどそうかもしれない。しかし、かりにそうだとすると、それは「死」という現象の解明において、和辻には寄与するところがないということの意味しない。むしろ和辻の洞察は、ハイデガーによる解釈の「隠された前提」に光を投げかける。

それはひとつには、だれが死ぬのかという問題にかかわる。「死」について考究する際、ハイデガーと和辻は異なった存在者を想定している。ハイデガーは、動物や人間から区別して、もっぱら「現存在」について論じる。それとともにその「死」からは動物性が排除される。それに対して和辻は、アリストテレスの「ポリス的動物」を視野に入れ、「人間」を主題化する。

もうひとつには、「死」と「死亡」の区別を踏まえて、両者の共有可能性について改めて考察する必要がある。なるほど「死」は、ハイデガーが指摘する通り、たんなる「出来事」にとどまらない。むしろこの現象には、各人の「固有の可能性」という視角から光が投げかけられなければならない。しかし当の可能性は、はたして共有不可能なのか。

死にゆく者とその近親者の関係のうちに、ハイデガーは公共性の支配を認め、自他が死ぬ可能性の隠蔽を指摘する。しかしこれは少なくとも、事態の半面にすぎない。臨終、通夜、葬儀、法要は、参列者に、自分自身の「死」を受けとめる「真剣さの好機」(キェルケゴール)を提供するかもしれない。遺された者たちの絆が深まるかもしれない。「死」という可能性は広く共有可能であり、だからこそ和辻は、また後年のハイデガーは、人間を「死すべきものたち」と捉えるのだろう。

各自のもっとも固有な可能性を覆い隠すことなく、かといって公共的な言説に終始することなく、「死」を共有する可能性があるのではないか。それを追究することは、『存在と時間』では十分に展開されていない「共存在」の本来の可能性を究明することでもある。こうした視角から、死の人称性に注意を払いつつ、「死」と「死亡」の共有可能性について発表者の結論を提示する。